日本愛妻会と横浜ペンクラブ①

戦後復興期の横浜では、復興の気運を盛り上げようと、様々な文化行事が華やかに繰り広げられた。その担い手であった文化人や政財界人たちは、やがて日本愛妻会や横浜ペンクラブといった組織に集まり、さらに新たな文化行事を生み出していった。

今回はまず、戦後の文化行事の変遷をたどりつつ、その担い手となった人々を紹介し、愛妻会と横浜ペンクラブ結成までの経緯を追ってみたい。

文化の復興

戦後、占領軍の進駐を迎えてすぐに、横浜の文化人たちは動き始めた。一九四五（昭和二〇）年一〇月に、米第八軍の後援を受けて横浜文化協会という組織が生まれている（『神奈川新聞』45．11．18）。一方、同年一〇月に創設された横浜市復興会でも、文化行事の実施が計画されていた。横浜市復興会は、戦時中に横浜商工会議所を改組した神奈川県商工経済会を中心に結成された組織で、会長には会頭の平沼亮三が就任している。この横浜市復興会主事として文化行事の企画運営を担っていくのが、中山富久である。

『神奈川新聞』は、同年一一月一一日から紙面に「神奈川文化」と題する文化欄を設け、文化団体の紹介や文化人の提言を掲載するようになった。

中山富久も横浜市復興会主事の立場で、この欄に提言を掲載した。「復興への情熱　神奈川文化への構想」と題して中山は、文化こそ「新しき時代の新しき力」であり「唯一の希望」であり、文化の創造が民主主義の芽生え、「不平不満のない生活」の創造をもたらすと訴えた。そして、横浜文化懇話会の結成を呼びかける（『神奈川』45．11．21）。その使命は、新しい文化の創造であり、「横浜市復興への不断の協力」であった（『神奈川』45．11．24）。それこそが、文化人に課せられた責務だというのである。中山の他にも、後に横浜ペンクラブ結成の中心となる作家北林透馬が、「民主主義的文化都市の創設」と題する提言を行っている（『神奈川』46．1．3・4）。

このように、文化活動に対する関心が高まるにつれて、多くの文化人が参加して様々な文化行事が開催されていく。「神奈川文化」欄では、そのきっかけとなる企画が実施された。

一九四五年一二月六日から六回掲載された「復興文化座談会」には、北林透馬と詩人笹沢美明・俳人大野林火、横浜文化協会の市村信也、横浜市市民課長と横浜市復興会の中山富久らが参加している。そのテーマは、「潰滅の状態にあった神奈川文化を如何にして復興すべき」かであった。

このなかで北林透馬は、現在の日本は「文化に裏付けられた政治」を目指すべきであり、そのためには「デモクラシー文化を樹立」させねばならず、そこに「文化人の任務」があると主張した（『神奈川』45．12．6）。

また、中山は復興会において市民芸能祭が企画されていることを紹介している（『神奈川』45．12．7）。これは、文化人の活動だけでなく、市民をも巻き込んだ文化行事を起こしていこうという姿勢を示している。その具体的な動きが現れるのは、翌一九四六（昭和二一）年に入ってからのことである。

伊勢佐木復興祭

戦前には開港記念日にちなんだ行事が盛んに行われたが、戦時中は開港記念祭もバザーも中止され、戦後すぐには復活しなかった。それに代わって戦後文化行事復活の先駆けとなったのは、一九四六年から翌年にかけて開催された伊勢佐木復興祭・市民芸能コンクール・貿易復興祭などであった。

中山富久の著書『文化をめぐる遍歴』（第二書房、一九五二年）によると、中山は当時横浜市復興会主事として商店街の復興を目指す事業に関わっており、そのなかで伊勢佐木復興祭のアイデアが生まれ、伊勢佐木町振興会が中心となって実現に至ったのである。先の「復興文化座談会」以来、祭や文化行事のあり方を考えていた中山は、地元文化人を起用すること、そして文化展で広く市民から作品を公募することなど、新たな要素を盛り込んだ。

「新しい日本に於ける祭典の魁たるを企図」した復興祭は、「復興祝賀行進」「復興祝賀記念芸能祭」「祝賀（納涼）音頭大会」「祝賀ハマ街頭文化展」といった四つの行事を計画し（『文化をめぐる遍歴』）、一九四六年九月一四日・一五日に開催された。実際には、これに素人演芸大会とミス・ヨコハマの選出が加わる（以下復興祭については、『神奈川』46．9．4・5・9・12～16の記事による）。

素人演芸大会は市民から出演者を募集したが、歌謡曲を筆頭に申し込みが殺到し、予選を繰り上げて一三日に実施するほどであった。そして一四日・一五日には、

伊勢佐木町のにぎわい　松喜屋前　1946（昭和21）年頃
横浜の空襲と戦災関係資料（青木健一郎氏提供）

伊勢佐木町の特設会場でも披露された。ミス・ヨコハマの審査員には、伊勢佐木町振興会長上保慶三郎のほか、平沼亮三らも加わっている。こちらも申込者が多く、期日を繰り上げて一四日に審査を行った。

文化展の審査員には、中山の他北林透馬・大野林火ら「復興座談会」参加者が名を連ね、文芸入選作品が九月一二日・一三日の『神奈川新聞』紙上に掲載された。入選作品は、伊勢佐木町の街頭でも展示された。一五日には、尾上町のオリンピックホールで復興祝賀式典が催され、半井清横浜市長・内山岩太郎県知事・平沼亮三らの祝辞があった。これに続いて芸能祭が催され、その模様は全国にラジオ中継された。この後、花山車の祝賀行進が行われ、ミス・ヨコハマも参加して、観衆は数十万に及んだと『神奈川新聞』紙上に報じられている。

横浜芸能コンクール

伊勢佐木復興祭における芸能祭、素人演芸大会は、同年秋の第一回横浜芸能コンクールへと発展していく。

これに先立つ九月三〇日、伊勢佐木町松喜屋前で復興をテーマとするNHKの街頭録音が行われた。これを受けて中山富久は再び『神奈川新聞』に提言を発表して、「文化総力の結集」と「文化的教養を高め」ることを訴えた（46．10．5・6）。その手段として、芸能コンクールが計画されたわけである。中山は市生活課長にこの企画を持ち込み、すぐに半井市長の理解を得て、実現に至ったと述べている（『文化をめぐる遍歴』）。おそらくは、伊勢佐木復興祭の成功が、スムーズな決定の後押しをしたのであろう。

主催は、横浜市の他に横浜市復興会・横浜観光協会・神奈川新聞社となっており、運営役員として会長に半井市長、常務理事に市生活課長や中山、そして理事にオリンピック社長木下茂やさくらポート社長阿部源司らが加わった。募集部門は、音楽・舞踊・歌謡曲・演芸・演劇・絵画・写真・文学・宣伝美術となっている（『神奈川』46．10．6）。一〇月二六日から予選が始まり、審査には、吉田仁吉・青木純二・中山富久・木下茂ら地元文化人が当たった（『神奈川』46．10．27）。

その反響は大きく、伊勢佐木復興祭の際と同様に申込が殺到したという。予選を終えて『神奈川新聞』は、「文化人総動員による終戦後初の大規模な文化まつりだけあって市民の芸能熱は予想外に旺盛であった」と報じた（46．11．6）。そして、一一月二三日・二四日・二五日に横浜公園野外音楽堂で本選が行われ、ここでも大観衆を集めたという。二三日の開会の際、半井市長は挨拶のなかで、「この市民の内から盛り上る力を結集して更に各方面に押しすすめたら、国際都市横浜が昔日の面影をとりもどすのも遠い将来ではあるまい」と、期待を述べている（『神奈川』46．11．24・25・26）。

戦後の困難な状況のなか、市当局者や関係者は、文化行事に集まる市民のエネルギーが復興を推進していくことを期待していたのであろう。この後、毎年市民芸能祭が開催されることになる。さらには、翌年の貿易復興祭の開催へとつながっていくのである。

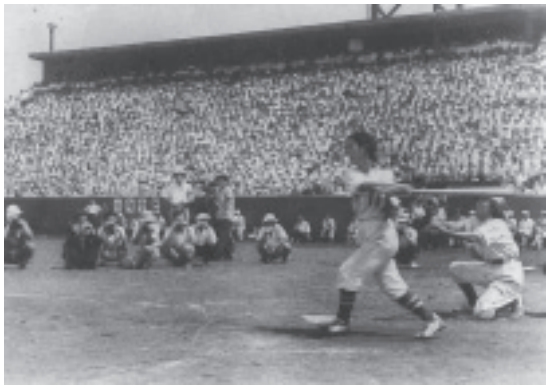
貿易復興祭

翌一九四七（昭和二二）年八月一一日に、民生局に文化課が設置され、中山富久がその芸能文化係長に就任する。文化行事担当は、その後一九五一（昭和二六）年一〇月設置の市民局市民課文化係を経て、翌一九五二年以降は教育委員会へと移っていく。

この間の文化行事のなかでも、大がかりで参加者・観覧者が多かったものの一つが、貿易復興祭である。これは、一九四七年八月から民間貿易が再開されることとなり、これを祝して開催された。一五日にさくらポートで祝賀式典、横浜公園音楽堂で祝賀市民大会が開かれ、石河京市市長も出席して挨拶をしている。八月一五日から二一日までの期間中は、輸出品移動展、輸出品展覧会、祝賀バザーが催され、花電車・花バスの運転、祝賀アーチの飾り付けなどが行われた（『神奈川』47．8．14・16）。

また、貿易復興祭に呼応して、横浜市と神奈川新聞社が共催で「働く市民の六大文化祭」を計画した。その一つがミスヨコハマ、ミスターヨコハマの選出で、他にオール横浜女子野球大会、市民納涼仮装文化祭、野外ダンスパーティーなどが行われた（『神奈川』47．7．20、8．4・9・22・28）。

ミスヨコハマ、ミスターヨコハマの選出は、二五日にオリンピックホールで行われた（『神奈川』47．8．26）。女子野球大会は、二九日に横浜公園のルー・ゲーリック球場で開催された（『神奈川』47．8．30・31）。ビクター・日産・文寿堂など地元企業と女子商業のチームが参加し、大観衆を集めたという。また、この日女子野球大会の後、新東宝と松竹の俳優チームが特別試合を行い、観衆を喜ばせた。参加した俳優には、佐野周二・長谷川一夫・藤田進の他、地元横浜の江川宇礼雄らがいた。横浜市の事務報告書によると、この日の観衆は一万五〇〇〇人であった



女子野球大会　1947（昭和22）年8月29日
（横浜市史資料室所蔵）

という。また、仮装文化祭は三〇日に開催され、ビクター・共栄自動車・古河電気・京浜運輸といった地元企業がそれぞれ工夫を凝らした仮装の山車が参加し、野毛から市内を行進した（『神奈川』47・8・31）。

なお、この年一二月四日・五日には、第二回芸能コンクールが開催されている。以上のように、一九四六年から翌年にかけての文化行事には共通性が多い。芸能コンクールや仮装、パレード、ミスあるいはミスターの選出などは、後のみなと祭とも共通する行事であった。こうして、横浜における戦後文化行事の原型が形作られたのである。

北林透馬と牧野勲

その後、一九四九（昭和二四）年三月一五日から三ヶ月間に渡って、神奈川県と横浜市共催の日本貿易博覧会が開催される。また、翌一九五〇（昭和二五）年には、開港記念みなと祭が本格的に復活する。

文化行事はより多彩になり、様々な主体によって担われるようになっていく。そのなかで、とくに注目されるのが、一九四六年一〇月に再建された横浜商工会議所と、横浜ペンクラブである。その中心にいたのが、北林透馬と牧野勲であった。

牧野勲はもともとは新聞記者であったが、戦後一九四七年から尾上町で「三春」という喫茶店を経営し、一九五三年には港町に移転して画廊併設の喫茶店「ホースネック」を開店させている。この牧野の店が、活動の拠点となった。また、牧野は、加賀料理飲食喫茶業組合の副組合長・相談役に就き、一九五〇（昭和二五）年から五年間、横浜商工会議所の議員となる。このことが、牧野が様々な文化行事に関わるきっかけの一つとなった。また、北林透馬とは、戦前に結成した海港文学の会に共に参加して以来の仲である。

なお、牧野勲に関しては、以前「戦後横浜の文化サロンホースネック誕生物語」（『横濱』一六号、神奈川新聞社、二〇〇七年）で紹介したことがある。これは、横浜市史資料室が所蔵している「牧野勲関係資料」に基づいて書いたものであり、当資料は、横浜ペンクラブと愛妻会の貴重な原資料を含んでいる。以下の記述も、主にそれらの資料に拠っている。

ところで、横浜ペンクラブはすでに一度、一九四九年五月五日、早瀬利雄・北林透馬・安田樹四郎・扇谷義男らによって結成されていた（『神奈川』49・5・7）。しかし、このときのペンクラブは具体的な活動を見せないまま、一九五三（昭和二八）年に再結成されることになるのである。この間のいきさつについては、内田四方蔵「二度あったハマペン発足」（『横浜ペンクラブ会報』一四号、二〇〇三年六月一五日）が紹介している。

日本愛妻会

この第二次横浜ペンクラブに先だって、日本愛妻会が結成される。「日本愛妻会NO.1経過報告」によると、一九五二（昭和二七）年一一月初旬に横浜商工会議所議員らの集まりで、妻をねぎらう会を催したいという案が出たのが、そもそもの発端であったという。牧野を含めた商工会議所議員に会頭半井清、ホテルニューグランドの野村洋三、それに北林透馬のあわせて九名が発起人となり、牧野が趣意書と規約を起草した。

趣意書には、「愛妻こそ文化日本のシンボルであると社会に再認識せしめ」たいとあるものの、それ以上の社会的意義をことさら訴えることはない。中山富久を中心に、文化人こそが復興を後押ししなければならないと訴えたような気負いは、見られない。

日本愛妻会の集まりでの北林透馬・余志子と牧野勲（左端）
牧野勲関係資料（横浜市史資料室所蔵）

規約では、「本会は家庭生活の向上、醇化を目標に文化並に家庭的な諸行事を主催するほか、春秋二期に総会を開き愛妻の為めに美しい一日を過すものとす」とあり、あくまで夫婦そろっての会員相互の交流が主目的であった。しかし、会員には、半井・野村の他横浜商工会議所議員や住田楼松本薫のような地元老舗の主人に加え、鈴木長之ら市会議員、白幡万平ら県会議員が加わっており、当時の横浜の主立った政財界人が集まったことに意味があったといえるだろう。一一月二〇日に伊勢山皇大神宮で結成式を開催し、その後箱根へと移動して「清遊」したという。

翌一九五三年の同じ日に、市長公舎で一周年記念ガーデン・パーティーを開いている。当時の市長平沼亮三は、この年から新たに愛妻会に加わった。これに関連して、おもしろい話がある。平沼の秘書であった松本興が書いた『聖火をかかげて』（同刊行会、一九六三年）によると、突然市長室へ二、三の客が来て愛妻会会長就任を依頼したというのである。おそらく牧野らが出向いたものと思われるが、松本は「不思議な会もあるもの」と書いているように強く反対したという。ところが、平沼はこれを押し切って参加し、市長公舎でのパーティーを手配した上、会長（名簿では理事長）も引き受けた。

そして、一九五六（昭和三一）年

一一月二三日には、再び五周年記念ガーデン・パーティーを市長公舎で開いている。この年には、会員も一〇七名に増加したという（『妻の笑顔』第一号、56.12.5）。この間、毎年懇親会を開催し、一九五五（昭和三〇）年には、平沼が名誉会長になり、半井清横浜商工会議所会頭が会長に就いている。その後の活動については記録が途絶えるが、横浜市史資料室所蔵の半井清資料には、一九五八（昭和三三）年版の名簿が残されており、その頃までは活動の実態があったものと思われる。

横浜ペンクラブ

政財界人中心の日本愛妻会の活動の一方、牧野・北林の二人は、横浜ペンクラブを拠点に独自の文化行事を次々と立ち上げていった。

横浜ペンクラブ結成の動きは、牧野・北林が中心となり、早瀬利雄・丸太三平・尾上農理夫・牧内正男らに呼びかけて、一九五三年七月三日にさくらポートで発起人会を開催するところから始まる。

横浜ペンクラブ結成の頃の北林透馬と牧野勲　根岸屋にて
1953（昭和28）年7月12日
牧野勲関係資料（横浜市史資料室所蔵）

実は、これより少し前、みなと祭に当たって、二人は横浜商工会議所において国際仮装行列開催を提案し、この年六月二日に第一回として実施されていた。これが、今に続くみなと祭国際仮装行列の始まりである。こうして、日本愛妻会に続いて国際仮装行列と、横浜商工会議所を拠点とした企画を成功させた二人は、いよいよ自らの拠点づくりに取り組むことになった。

その規約には、「相互の親睦を旨とし、港都の国際的性格を創造する文学形成に寄せる意欲を昂めることを目的とする。」とあり、独自事業の他、「横浜文化の伸長に役立つ事業に協力する」とあり、文化人ならではの積極的な意欲がうかがえる。なお、横浜ペンクラブ結成の経緯については、『横浜ペンクラブ会報』九号（一九九八年六月一日）掲載の小柴俊雄「資料にみる横浜ペンクラブ発足のころ」および五十嵐英寿「横浜ペンクラブ回想」が、その流れを明らかにしている。

発起人会の翌四日には早くも、横浜ペンクラブ主催で、「混血孤児を幸せにする集い」と称してダンスパーティーをさくらポートで開催した。これには、北林や平野威馬雄ら作家の他、藤原義江・佐藤美子・江川宇礼雄ら歌手や俳優、さらにエリザベス・サンダース・ホームの沢田美喜らが出席し、ホームに寄付金が渡された。

そして、七月一三日にさくらポートでの結成式を迎える。同日の『神奈川新聞』紙上に、発起人代表として北林は、「手をつなぐハマの文筆家たち！」と題する広告を出し、翌年の「開国百年、開港九十六年の記念すべき日を前に」結成される意義を強調している。参加者については、横浜ペンクラブ会員候補の名簿が「牧野勲関係資料」に何種類か残されているが、実際の会員を示す確かな記録はない。新聞報道による結成式出席者は、北林透馬・北林余志子・牧野勲・早瀬利雄・吉田仁吉・八木義徳・丸太三平・尾上農理夫・神谷量平・草薙正夫・岡本薫・秋山安三郎である（『神奈川』53・7・14）。

話の広場　中央に半井清　1957（昭和32）年12月5日
牧野勲関係資料（横浜市史資料室所蔵）

正式に発足した横浜ペンクラブは、一五日に平楽町の増徳院で横浜縁故文人追悼会を開いた。有島武郎・直木三十五・岡倉天心らが、追悼の対象となった。まさにこの追悼会が、その後次々と生み出されていく文化行事の原点となった。翌一九五四（昭和二九）年二月一四日には、開国百年のプロローグとしてワーグマン追慕式を主催し、内山岩太郎県知事や半井清横浜商工会議所会頭らが出席している。また、一九五五年三月六日には、中山富久と協力して文学散歩を横浜市教育委員会主催で開催し、これがきっかけとなって横浜文芸懇話会が生まれる。

さらに一九五七（昭和三二）年一二月五日、著名人を呼んでその話を聞くという「話の広場」が催され、これが翌年一月には「ヨコハマ話の波止場」へと発展していく。その世話人代表は半井清、その他世話人には北林・牧野と、牧内正男・扇谷義男・松本薫らが加わっており、愛妻会と横浜ペンクラブ双方の会員が参加している。まさに話の波止場は、政財界人と文化人が共に参加して交流する場であった。

こうして、戦後文化行事を支えた文化人や政財界人が、日本愛妻会・横浜ペンクラブ・横浜文芸懇話会・ヨコハマ話の波止場へと集まってきたのである。これらの団体による文化行事は、その後も盛んに行われる。その詳細は次の機会に、愛妻会と横浜ペンクラブの具体的な活動と共に改めて紹介することとしたい。

（羽田博昭）